

つくづくと思ひ続けることは、なほいかで心と疾く
なんとかして自分の意思で早く

死んでしまいたい

死にもしにしがなと思ふよりほかの

ひとりいる子(道綱)

こともなきを、ただこの一人ある人を

思ふにぞ、いと悲しき。人となして、

しつかりした

後ろやすからむ妻などに預けてこそ、

死にも心やすからむとは思ひしか、

寄る辺のない暮らしをするのであらう

いかなる心地してさすらへむずらむと

どうしよう

思ふに、なほいと死に難し。「いかがはせ

姿を変えて(尼になって)

む。かたちを変へて、世を思ひ離る

やどころみむ。」と語らへば、まだ

しやへりあびて

深くもあらぬなれど、いみじうさくり

おいおいと

もよよと泣きて、「さなり給はば、まろ

も法師になりてこそあらめ。

何せむにかは世にもまじろは
まじつて暮らしましよう

む。」とて、いみじくよよと泣けば、我も
おいおい

涙を「らえむ」ことができないが
えせきあへねど、いみじさに、たはぶれに

言ひなさむとて、「さて鷹飼はでは、

いかがし給はむずる。」と言ひたれ

ば、やをら立ち走りて、しすゑたる鷹
(止まり木につないでおいた)

を握り放ちつ。見る人も涙せきあへ
止めることができず

ず、まして、日暮らし悲し。心地におぼゆるやう、

あらそへば思ひにわぶるあまぐもにまつ

そる鷹ぞ悲しかりける

とぞ。